

# 難波西鶴と海之道

【55】

森田 雅也

引き続き「世間胸算用」「元禄5(1692)年刊」巻四の四「長崎の餅柱」の話です。万事に賢く、正月にも長崎から京都に帰らず、仕事一筋の生糸商人がいましたが、成功できないままです。商売に工夫いるのが長崎だというのが、前回までの話でした。

一方、同じく京都からやってきている同じ生糸商人の中にも、丸山遊郭に通い、物見遊山や花見などして裕福に暮らしている商人たちも数知らずいます。この違いはどこにあるのでしょうか。西鶴はそのコツをある商人に語らせました。その商人によれば、大もうけするには、長崎特有の難しい生糸相場を見極めて、どこで大きく投機するかが肝要としていいます。

しかし、そのコツを知る商人といえば、相場の下がりも上がりも、もつげも見事に予測するのですが、用心深すぎる性格なのか、もつげをその都度、必要な額だけ得るのが常でした。

そのため、資金を借りた人たちに、そのもつげを利子として返してしまつと、手元には自らの師走の支払いも十分にできず、大みそかは掛け払い(1年間の掛け売りの代金請求)の取り立てに来る商人を避けるため、いつも京都の自宅に戻れず、京都周辺の橋本京都府八幡市)で年を過ごすというありさまでした。

さすがにこの商人も自らの商人としてのあり方を世間と念を入れ、よくよく見比べて、

## 大もうけのコツ

「たしかに小規模に商売しておれば大きな損にはならないが、皆があこがれているような大もうけができない。今年は何でもよい、本業の生糸商売以外に工夫して、大もうけせずにはおかないぞ」と一念発起します。

そこで、その一大決心とともに長崎に下り、いろいろと思案をめぐらせますが、もうかりそうな仕事はひとつもありません。仕方なく、「ともかく、来春の見世物芝居の見世物が欲しい。もしや、海を越えてきた舶来品にこそ、いい物があるのではないか」と長崎中を探し回ります。

以前に長崎商いで紹介した「あま電(コモドラゴン)の子」、

「火食い鳥」が珍しい見世物なのですが、購入するツテがありません。中国の人に珍しい舶来品について相談しますが、「鳳凰も雷公(かみなり)も見た者はいません。伽羅も人參も日本では希少なものは中国でも少ないのです。皆、もうけたいから、百万里の荒海を越えて命をかけてやってくるのです。そんなうまい話はありません」と諭されます。

それでも懲りずに舶来の鳥を購入して、京都に帰りますが、誰も珍しがらずもうかりません。ところが、ありきたりな孔雀の人氣で損だけはしません。皮肉なものですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 生糸商人が一念発起